

TOKYO美人と、東京1000ストーリー

約者は刑事 ② 5回連載(005 銀座)

穂高健一

井伊佳元はタク

シーの車窓から、夜明けまえの空を見あげた。池袋のビル群の谷間には星がやや残るが、藤紫色に染まりはじめている。かれは運転手に、その先のセーフ



ティー前で停めさせた。まだ深夜料金で、5時すこし前だった。従業員専用の出入口の横には、警備会社の車が停まっている。「おいぼれ機械め。月になんぞ故障したら、気がすむんだ」寝入りばなを起された井伊は、わずか3時間の睡眠に苛立つて

いた。46歳にして、この睡眠は辛い。通用口はすでに開錠されている。かれは納品口横の地下階段を降りはじめた。

「ついてないよな。このところ、たて続けだ」

4日まえも真夜中に、『火事が発生』と警備会社から、ケイタイ電話に通報が入った。井伊が下町の自宅から急いで池袋店に駆け

つけたところ、火災報知機の誤報だった。それらも遡さかのぼって腹が立っていた。



店舗の設備は数多い。そのなかでも、とくに冷凍機異常、電気経路の漏電警報、汚水槽の満水警報などが、深夜とか、休日とか、それらにまったく関係なく発生するのだ。第一連絡者の店長のもとに電話が入ってくる。まさに24時間にわたって拘束の身だ。池袋店のように、老朽化した店舗となると、ウンザリするほどトラブルの発生が多い。

むろん、自宅から業者に、電話ひとつの手配だけですむ場合もある。しかし、大半はないがしろにできず店に駆けつける。

地下への階段を降りきった先が、機械室だった。ドアは半開で、室内灯が通路まで洩れていた。30代の制服ガードマンがこちらに気づき、「苦くる労さま、と挙手をしてから、

「私は、機械に疎いもので」

と言いつけの口調でいった。

「もうすこし知識をもってくれよな。機械設備の監視を請け負う、警備会社のガードマンだろう。金を取っている以上はプロだ」

「すみません」

「先刻、寢床で、あんたからの電話を聞いていても、どこの機械が故障しているのか、まったく要領を得なかった。冷凍機の異常だとわかるまで、15分以上もかかっているんだ。これは単に愚痴じゃない。冷凍機は機種によっては一刻を争う」

「申し訳ありません。今後、勉強します」

「夜明けまえに呼びだされた以上、もう一度自宅に帰って、ひと眠りするわけにはいかないんだ。それに、きょうは9時半から、本社で販売戦略会議があるし……」

この会議は、各商品部から、翌月のチラシ商品や演出物などの説明が延々とつづく。店長は質問しないかぎり、一方的な聞き役だ。それだけに、井伊には睡魔とたたかう自分の姿がかんたんに想像できた。

かれは睡眠不足の欠伸をかみ殺しながら、6台ある冷凍機械を一つひとつ見てまわった。大型冷凍機のひとつが、赤い異常ランプを点滅させている。「やばい。冷凍食品のマルチじゃないか」



機械は死人のように停止状態だった。『復旧』ボタンを押してみた。電源の入切り切りもやってみた。しかし、遺体にカンフル剤を打つかのように、まったく無反応。リセットがきく単純な高圧カットではなかった。

「くそっ」

井伊の眠気が吹き飛んだ。かれは一階の食品売場へとかげ上がり、片っ端から店内蛍光灯を点けた。冷凍食品コーナーは、明日のチラシ販売分を含め、びっしり詰め込まれている。それら冷凍ケースの温度を読みとった。どれもがプラス25度前後だった。「最悪だ。デフ（デフロスト・霜取り）のさなかに、冷凍機が故障している」

デフとは冷凍ケースや冷凍庫の霜を取るために、熱源ヒーターで、一時的に温度をプラス40度以上まで上げる。それで霜を溶かす。40分間ほど続ける。そして、今度は急冷で、マイナス25度まで一気に下げる。

いまは、冷凍ケースが高温に上がったまま、マルチ冷凍機が故障しているのだ。急冷ができていない。このまま高温で3、4時間経つと、アイスクリームはぬるま湯につけたように柔らかくなる。むろん、冷凍食品も同じ。



一刻を争うと判断した井伊は、すぐさま保守契約先の会社にコールした。あいての中年女性は夜間の電話受付係のみで、技術面ではまったくの素人だった。そのうえ、眠たげな気のない応対だ。「いまは夜勤の常駐者が出払っているんです。帰ったら、池袋店に向かわせますから」

そんな悠長な（ゆうちやうばう）ことでは、冷凍の食品関係は全滅だ。

「もっと緊急の対応をしてくれ」

「どこか、別の冷凍庫に移せないんですか？」

「冷凍機はマルチなんだ。売場にも、バックヤードの冷凍庫にも、冷気が回ってない」

「提携先か、協力会社などもあたってみます」

「たのむ。サービスマンが池袋店に何時に来れるのか、まずそれを教えてくれ。それによってこちらの対応も変わってくるから」電話を切った井伊は、冷凍機のコンプレッサーの焼損という最悪状態を想定した。その場合は復旧までに5、6時間を要す。となると、商品は全滅で、廃棄は6、70万円以上に及ぶだろう。

（アイスクリームだけでも、延命策をとっておくか）

かれは鮮魚作業場に足を運んでみた。ここは対面販売で、魚を調理しながら、売場がみえる構造だ。単独の小型冷凍庫を持つ。デジタル表示の庫内温度をみると、マイナ23度。この系統は大丈夫だった。

頑丈な引き戸を開けると、白い冷気が足もとからモコモコ広がった。最近では刺身商材でも、やたら冷凍品が多い。庫内にはカニ、

海老、マグロ、イカなどが高く積みあげられている。これら商品は賞味期限が長いことから、担当者は多めに在庫をもつ傾向にある。

（整理して積みなおせば、売場のアイスクリームは押し込めるだろう）

6時半になれば、早朝荷受人が4人ほど出勤してくる。それらの手でアイスクリームを移動させよう。かれらがすぐ対応できるようにと、井伊は手押しのカット台（運搬車）とか、トートボックス（収納箱）とかをアイスクリーム売場集めはじめた。

それが一段落すると、こんどはバックヤードの大型冷凍庫に向かった。ここは日配食品、惣菜、ベーカリー部門が共有する。



【冷凍機が故障中。ゼツタイ開けるな。冷気を庫外に逃がすな】パソコンで、一枚の張り紙を作成し、貼りつけた。

時おり、かれは保守会社に連絡を入れてみた。すぐ動ける作業員が、まだ見つかっていないという。

「協力会社まで拡げて、当たっていますから。もうちょっと待つてください」

そんな返事のくり返しだった。

6時15分。井伊がもう一度、鮮魚作業場にやってきた。外線電話が鳴った。こんどこそは期待できそうだな。

「サービスマンと連絡がついた？」

井伊は作業場の子機を持ち上げるなり、そう訊いた。

「その声はいい加減さんですね。わたし、布施和香奈です」

予想外の電話で、井伊のことばが咽喉につまった。彼女にはメロンの投書で世田谷まで呼び出された。あれから約一週間が経つ。

「おねがいがあつて……」

「ボクが店にいると、なぜ判った？」

「スーパールの店長さんは朝が早いんですよ。なにかで読んでいたから。……6時過ぎたなら、もう出勤しているかと思って」

「それはひと昔のはなしだ。きょうは特別なんだ」

「猫が消えたの。大変なことになったの」

彼女の声^{うわさ}が急に上擦った。

「猫？」

「こっちは冷凍機が故障して、大変なんだ」

井伊は耳を貸す余裕などなかった。

「聞いてください。わたしの勤める、銀座3丁目のTAKANO画廊で、一昨日の夕方から昨日の朝にかけて、猫が消えたの。いっしょに猫を捜してください」



「逃げた猫をさがす？ そんな暇人^{ひまじん}じゃないよ。それに犬猫は嫌いだ。猫が逃げだところで、同情すら感じない」

「いい加減さんはシャープで、推理力も、洞察力もある、という評判です。腕の良い裏稼業人ですよ。わたしの頼みごとを聞いてください」

「猫が何者かに盗まれた、事件だと思えば、警察に相談してみたらいい。あるいは保健所に。保健所は、犬とちがって、猫は取り扱わないかな？」

「冷たくしないで。おねがい」

彼女は頼りきった口調で、ずいぶん粘っていた。

「猫の生態など、ボクはまったく知らないんだ。銀座の画廊から逃げた猫は、おおかた築地魚市場あたりで、フラフラと魚を漁ってるじゃないか。そうだ、どの地域にも早朝に、野良猫に餌付けして、避妊させている、ボランティアがいるはずだ。そっちに相談してみたらいい」

井伊の視線が店内にむけられた。早朝荷受人の巨体の男が店内に現れた。相撲取りが四股を踏むように歩く。井伊が手招きすると、巨体男がノソノソ鮮魚作業場まで入ってきた。

井伊は受話器を半分ほど塞いでから、

「売場のアイスを、急いで、この鮮魚冷凍庫に移してくれ」と布施和香奈にも、多少のところ聞こえるようにいった。

「店長、もう納品口に、物流センター便のトラックが到着しています。そちらの荷卸しを早くしてやらないと。次の店にいけない、

とドライバーがきつと怒りだす」

「いいから、こつちが優先だ。冷凍機が故障しているんだ。アイヌがふにやふにやになったら、後で氷らせても、売り物にはならない。全員でやればすぐ終わる」

そう追い立てると、巨体男はその仲間を呼びにむかった。「いい加減さん、聞いていますか」

「耳は生きている。オン・エアーだ」

「消えたのは、あさってから開かれる、『城山比呂志展』の油絵の猫なんです」

「えっ、油絵から猫が飛び出した……？」

「城山先生がニュージールランドで描いた絵です」

「外国の猫なら、横浜港で貨物船に乗ったか、成田空港から貨物機に乗り込んで、母国のニュージールランドに帰ったんじゃないの」

井伊は押搦して突き放した。

「あした午後3時から、城山比呂志展の前日の、最終打ち合わせなんです。それまでに、絵のなかに猫を取り戻さないと、大変な



ことになるんです。もう時間がないんです」

「あしたになれば、画家が銀座の画廊にくるんだろう。その場で一筆、逃げた猫とおなじものを描き込んでもらえば、万事解決。水彩画の絵の具作りとはちがって、油絵はかんたんなんだ。チューブから絵の具がしぼり出せるし、筆さえあれば、すぐ描ける」

「一筆で、かんたんに描ける猫じゃありません。コンクールの受賞作品ですから。画廊の信用問題、責任問題もありますから……」
彼女は必死だった。

電話子機の外線2番のランプが点滅する。

「ちよつと、急ぎの電話が入ってきたから」

「わたしも急いでいます。電話を切らないでください」
「いったん保留にする」

外線2番は保守会社の女性だった。池袋のデパートに夜間工事が入っていた作業員が一組回ってくれる。あと十五分でセーフティーに到着するという。

お札をいった井伊は布施和香奈の電話にもどった。

「はつきり言って、猫さがしは迷惑な話だ。あなたの婚約者は刑事だ。そっちに相談してみたら。調べたり、捜したりする職業だ」

「きのうの午後には、受賞作品の猫が居ないことに気づいて、警視庁に近い日比谷公園で、溝口さんに会って頼んでみました。うちは凶悪犯を取り扱う本庁捜査一課だ。猫が逃げたとか、盗まれたとか、そのていどは事件として取り扱えない、とすげなく断られ

ました」

「警察は人間しか取り扱わない……」

「そもも言われました」

「融通が利かない、婚約者だな。勤務が引けてから、いっしょに猫を探そうといえ、布施さんの心の支えになれるのに」

早朝荷受人の3人が手押し台車で、アイスクリームを鮮魚冷凍庫まで運んできた。かれらには、先に庫内を整理しないと、アイスは全量入らないぞ、と井伊は指図した。

「ドライバーが怒っています」

「放っておけ」

井伊が巨体男にむかって大声でいった。

「怒鳴らないでください。大切な絵なんです。放っておけないんです」

「悪い。こっちの話だ。店は、いまパニック状態なんだ」

「もう、わたし死にたい」

彼女の嗚咽が洩れてきた。泣かれてしまうと、電話は切るに切れなかった。

青い作業服をきた男性が店内に現れた。冷凍機の故障修理では時おりやってくる、顔見知りの作業員だった。こちらと視線が合った。かれらがそばにやってきた。いま機械室をのぞいてきたという。

「……コンプレッサーの焼損です」

「やっぱりか」

「これから手配しますけど、代替のコンプレッサーが店に届いてから、4時間はみてもらわないと。試運転と、冷凍ケース全体を冷やしきるとなると、5時間くらいは必要です」

「いま6時45分か。復旧は早くても11時半か」

冷凍機が復旧しても、商品は廃棄だ。見返りの新たな商品が入ってこないかぎり、売るのがない状態に陥る。

「わしらは応援だから、冷媒管のガスを抜いて、コンプレッサー取替えの段取りだけはつけておきますから」

ふたりの作業員が鮮魚作業場から立ち去っていく。

（商品の廃棄は保険金で補填できるけど、後の処理がたいへんだ）

それらの煩雑な手続きが井伊の脳裏を横切った。……廃棄品のたな卸し、写真撮り、事故報告書、損

保会社への提出書類は諸々ある。

そのうえ、開店するまえには、『機械故障中で、お客様にはご迷惑をおかけします』という内容の、お詫びPOPを張りだす必要がある。

日配担当者には、新たな冷凍食品を緊急手配させる。そう考えるだけでも、うんざりする作業量だ。こんな日にかぎって、本社で会議がある。

「……日比谷公園で、溝口さんに思い切って言いました。二度も



結婚式をすっぽ抜かし、わたしの悩みにも乗ってくれない。本心は、『財産狙いの結婚が目的なんですよ』と。溝口さんは顔を真っ赤にして怒りました」

「猫のことで、ストリートに言ってしまったのか……」

いやな展開になりそうだと井伊は身構えた。

『オレをそんなふうに見ていたのか。見損なった。和香奈の顔など二度とみたくない。二度と電話などかけてくるな。永遠の別れだ』といわれました、と和香奈が切なく悲しげに話すのだ。

その先は、話が途切れてしまっほほどに、嗚咽を洩らす。

「いまはショックで、辛いだらう

が、念願の婚約破棄ができたわけだ。気持ちはずぐにさっぱりするさ」

「溝口さんの怒った背中を見て、私の心は冬に咲いたバラの花のように、冷たく萎れてしまいました。もう愛も夢もないし、生きていく希望すらありません」

二度にわたる結婚式のドタキャンの末に、男のほうから婚約破棄を言い渡された。和香奈の心痛を思うほどに、井伊は彼女が哀れに思えた。他方で、巧い慰みのことばが見つからなかった。

「猫探しでは溝口さんにも、いい加減さんにも断られました。もう打つ手はなくなりました。画廊の信用を落としてしまい、心残



りですが、きょうあしたに死にます。わたしが死ねば、受賞作品の猫のことはわたしの所為になり、解決されるでしょうか」

「ここは、投げやりにならずに」

「もういいんです。これが最期のお電話です。いい加減さん、さようなら」

「待ちな。電話をきいたら、ダメだぞ」

「本心をお話しします。一度目の結婚式は流れ、二度目の結婚式もダメになり、宿命というものがあれば、この世では溝口さんと結ばれない運命にあるのだと思えました。先に天国に行つて、あの人を待ちたい。この世でだめなら、あの世でも良い、溝口さんといっしょになりたかったのです」

井伊は黙って聞いていた。

「死を選んだ、わたしの葬儀に、溝口さんが参列すれば、きつとわたしの親族から、『あなたのせいだ、和香奈が自殺した。どうしてくれるのよ』とつよい批判を浴びるでしょう。溝口さんの辛い立場を想像するだけでも、わたしの胸は痛みます。それがつらくて……。死ぬ前に、婚約破棄しようと決めたんです」

彼女の話が止まったが、井伊はなおも黙っていた。

「溝口さんとは会うたびに、婚約解消を切り出そうとしました。切なくて、辛くて、とても大好きな溝口さんに切り出せませんでした。だから、だれかに婚約解消を頼みたかったんです。偶然、裏稼業人を知ったのです」

「アームスメロンで、世田谷に呼び出した、というわけだ」

「そうですけど、わたしはふだんアームスメロンなんて買いません。いつもは600円前後の特売のマスクメロンです。結婚したら、給料の安い刑事の妻になるのよ、贅沢ぜいたくはダメ、といつも自分

分に言い聞かせていましたから」
「いい奥さんになれる。自殺することはない」

「もう、死ぬことに決めました」

「早まることない」

「600円でいどのメロンで、裏稼業人を世田谷まで呼んだら、安っぽいあいてだと断られると思いました。だから、1万5500円のメロンを3回も買いました。腐っていたなんて、嘘をついてすみませんでした」

「謝ることはない。よし、ここは本気で裏稼業人になろう。銀座の画廊から消えた猫を取りもどす。溝口刑事との婚約破棄はもう一度破棄し、三度目の正直で、あなたに花嫁衣裳を着てもらおう」
「えっ、ほんとうですか。わたし結婚できるんですか」

和香奈は信じがたいという、おどろきの声をあげた。
「もちろんだ。あしたの午後3時までには、絵画の猫を含めて、すべてを解決させる。刑事への愛の真意が見抜けず、一発必殺の極意を教えた、おれの責任の取り方だ」

「うれしい。いい加減さんが動いてくれるんですね」
彼女の声が弾んできた。



「善は急げた。まずは結婚披露宴を3月31日と決めよう。こういうことはいつまでもダラダラしないことだ。両家の意向など、後回し。いまからあなたの独断と偏見で、披露宴会場をきめる。印刷屋には、スピード案内状を刷らせる。一両日中には、投函できる手配をする」

「3月31日は仏滅ですけど」

「それはラッキーだ。どこの結婚式場もがらがらだ。割引率も高い。その分だけ、大勢、招べるさ」

「最初と、二度目のホテルを当たってみます」

「それがいい。挙式は3日以内にあげる。そして、入籍する。同棲でなく、新婚生活だ。3月31日は結婚披露宴のみだ。神主による挙式はすんでいるんだから」

「うれしい。いまから、いい加減さんとすぐ会えますか？ 二子玉川駅でどうですか」

「問題はそれなんだ。きょうは本社で大切な販売戦略会議がある。それが終わった、夜9時過ぎくらいから動ける」

「明日の午後3時がリミットです。」

もう時間はないんです」
「裏稼業に徹したいが、本業はスーパーの店長だ。おれのからだは一つ」



「男性はお仕事優先ですものね。溝口さんも、そうでした。どうぞ本業の店長に徹して、会議を優先してください。わたしが死ねば、猫事件も、わたしのせいで解決されますから。これから遺書をかき残します。両親宛には、すでに溝口さんとの婚約は破棄されている、と」

和香奈の落胆が、こちらの胸の奥まで突き刺さった。

「わかった。きょうの昼に会おう。落ち合う場所は銀座のどこにする?」

「12時に、二子玉川駅で。改札は一ヶ所です」

「なぜ、多摩川?」

「いい加減さんが現れなければ、その場で、多摩川に飛び込めますから。12時15分までは、水際でお待ちします。ホームから、多摩川のほうをみれば、わかる位置に立っています」

「待ってください。余裕がたった15分? こっちは冷凍機が故障しているんだ…」

…

「お世話になりました」

彼女が一方的に電話を切った。

「やばいな」

最悪のケースは、美顔が冷たい死顔になる。一発必殺の秘伝を与えた、道義的責任は大きい。ここはもはや行動あるのみだ。



井伊は食品売場が広く見える、サービスカウンターに移った。そこで鬼頭統括部長の短縮番号をプッシュした。

鬼頭は朝7時の早い出勤を自慢する。それが社長へのウリの一つ。読みどおり、すぐに出た。

井伊は朝の挨拶を一言いった。

「会議の前にかけてくるとは、良い電話じゃないな」

鬼頭が座る椅子の背板にふんぞり返っている。そんな高慢な態度が井伊には想像できた。

「きょうの明け方4時に、冷凍機のコンプレッサーが焼損してしまいました。冷凍食品は逃げ場がなくて全滅です。アイスクリームはかろうじて、避難させましたけど」

井伊はかしこまった報告口調でいった。

「今期に入ってから、何度目だ。冷凍ケースのロードライン(冷気の通り道)を塞いで、商品を過剰に詰め込むからだ。廃棄した商品は保険で穴埋めできると、安易に考えているんだろう。開店時から、冷凍食品の売場が空っぽで、どうする。お客さまにご迷惑をかける。それが客離れにつながるんだ」

鬼頭が頭ごなしに怒る。受話器を30センチ離しても、がんがん響く。

「池袋店の機械は老いぼれですからね。人間の寿命にたとえれば、80歳以上。そんな人間をロードレースで全力疾走させれば、心臓発作を起したり、倒れて骨折したりしますよ」

「それはいい訳だ。新品の冷凍機でも、商品を過剰に詰めれば、

冷やしても、冷やしても、追いつかず、コンプレッサーに負荷がかかりすぎる。連続運転のあげくの果てに、コイルが焼き切れるんだ。この原因は、小まめな商品補充をせず、一度に山盛りで詰め込むからだ。横着なしごとをやらせるからだ」

鬼頭が捲くし立てた。

「うちの店は、粒ぞろいの省エネ型社員を寄せ集めていますからね」

「なんだ。その省エネ型社員とは？」

「しごこの手間は極力はぶく、手抜きはする。喫煙室はいつも満室。からだのエネルギーは品だし作業で使わない」

「そういうことか。店長が、手抜きする部下の仕事をチェックせず、見逃している。それが根本原因だ。部下にたいする指導が悪いからだ」

「店長が注意すれば、ふて腐れる。指示すれば、忘れる。急ぎのときは見てみぬふりで、手は貸さない、イベントで忙しい日は、仮病で早退する。馬の耳に念仏型社員のオンパレード。人事部はよく集めましたよ」

「できの悪い部下を上手に使うのが、管理者の能力、力量だ。そうだろう」



「それは認めます」

「急に素直になったな。なにか裏があるな？」

鬼頭の怒りのトーンが落ち、疑いの口調になった。

「きょうの販売戦略会議なんですけど……」

「本題はそっちだな。また、学友が八ヶ岳で死んだのか。葬儀はどこで、きょうの何時だ？」

「生か死か、それはまだわかっていません。助かるかもしれませんが」

「その実、女に逢いに行くのだろう。魂胆は見えみえだ」

「ほんとうは会議に出たいんです。来月の販売方針を知ると知らないでは、業績におおきな違いが出てきますから」

「いつも会議で居眠りしているわりに、平気でよくいえるな。欠席したい理由をズバツといえ。いまは会議のまえて忙しいんだ」「ズバツと彼女に断ります。販売戦略会議を優先するから、と」「やぱり、女と会う約束だったのか。真実は隠そうとしても、こぼの端からぼろっと零れ落ちるものだ。大切な会議がある日に、女と密会したがるとは、不謹慎な男だ。店長としての自覚がない。資質にも問題がある」

鬼頭の声が荒立った。

「布施和香奈って、憶えていますか」

「うむ。急にいわれてもな。あつ、思い出した。上客の布施さまだな」

「そうです。実は、冷凍機のメンテ業者を待つ間、朝駆け夜討ち

で、布施さんに電話をかけてみました。今朝のこんな早い時間ですが、とわびながら。もう一度会って、謝罪したいと申し出てみたくです。1万5500円のメロンを二度も買ってくれた、お客さんですからね」

「お詫びは一度であきめない。お百度を踏む。そういう精神は大切だ」

鬼頭の態度がちがってきた。

「厄介な条件を出されたんです。布施さんは頼みごとを叶えてくれたら、腐ったメロンのことは水に流し、こんごとも東京芸術劇場の帰り、セーフティーを利用してもらいます、と」

「頼みごととはなんだ？」

「それがバカらしくて。銀座の画廊から逃げ出した、ニュージールランド産の猫を探して欲しい、というんです。それも今日のきょうです」

「そんな単純なことか」

「単純じゃないですよ」

「せっかくのチャンスだ。過去のクレームが解消されるなら、逃げた猫を徹底して探しだせ。協力しろ。このさき超高級メロンや下関のフグが買ってもらえるんだ」

鬼頭のことばに熱が入ってきた。



池袋店では、夕張の超高級アールスメロン、下関のトラフグの刺身、松坂牛の霜降り肉などが導入時からまったく売れず、棄て筋になっている。それを推奨する鬼頭にすれば、ぜがひともセーフティーに呼びもどしたい上客なのだ。

「猫なんて、ペットショップで、新品を買えばすむのに」

「新品だって。それは動物嫌いの発言だ。ペットへの愛情はわが子以上だ」

「彼女は独身です。できちゃった子もいないようだし」

「たとえばの話だ」

「……広い銀座ですよ。世田谷・岡本1丁目の布施和香奈さんをさがすだけでも、たいへんな苦労だった。こんどは猫ですよ、ビルの谷間を逃げ隠れる。無駄です、徒労です」

「そう悲観したものじゃない。わが家でも三毛猫を二匹飼っている。猫の行動範囲はわりに狭いものだ。銀座3丁目界限を徹底してさがせば、見つかる可能性は充分ある。猫は飼い主の愛情も、声もわかるし、呼べば、『にゃくん』という返事もする。朝食の時間もわかる。可愛いものだ」

鬼頭の緩んだ顔が見えるようだ。

「一度、逃げた猫が棲家にもどってきますかね？」

「棲家ということば自体が、猫嫌いだ。猫にとつても、人間どうように、わが家だ。お腹がすけば……」

「耳をぴくつと後ろに立てて、身を低く構え、ネズミを獲る」

「それはむかしの猫だ。お腹が空けば、飼い主にからだを摺り寄り

せてきて、甘える。ただ、飼い猫は知らない人には寄り付かない。知らんぷりする」

「それは最悪だ」

「猫は愛情をもてば、心が通い合う」

「そんな愛情はないしな。布施さんの婚約者は、警視庁捜査一課の係長で、捜査のプロだ。そっちに頼めばいいものを。なにも猫嫌いのスパーの店長にやらせなくても」

井伊はあえてボヤキの口調でいった。

「なんといった？ 婚約者は捜査一課の係長か」

「はい。30歳で、警部とか。実践では、あまり役立たないキャリアでしょうね」

「いい顧客情報だ。そういう毛並みのいい、お客さまはとくに大切にすべきだ。いまから銀座にいったら猫をさがせ。販売戦略会議の資料は、店に送らせる」

「猫探しより、会議で寝ていたほうが楽だけどな……」

「業務命令だ。一人のお客様を蔑ろにすることは、全体のお客さまを軽んじることにつながる」

「冷凍食品の保険金請求の資料作りもあるし」

「そんなことは店長代理にやらせ。そのために、代理がいるんだ」
「部長。まさか、猫が見つかるまで、池袋店に帰ってくるな、と



は言いませぬよね？」

「そういう点は先読みができるんだな。良い結果が出るまで、池袋店に帰ってこなくてもいい。猫は愛情しだいだ」

鬼頭が電話を切った。

手抜き型の店長代理に、保険金請求の処理を任せきる。それは不安で、井伊は一連の段取りをつけた。そして、出勤してきた店長代理に引き継いだ。

かれは店長ブレザーからスーツに着替えてから、池袋店を出た。牛井屋で朝食をとっても、まだ9時25分だった。

布施和香奈とは12時に多摩川だ。余裕がありすぎる。かれは地下鉄・有楽町線、日比谷線に乗り換えて銀座駅で降りた。地上に出ると、銀座4丁目交番で、TAKANO画廊の所在地を訊いた。中央通の松屋デパートの角を曲がった、マロニエ通りであった。

鷹野ビルは柔らかな朝日の光を反射させる、総ガラス張り9階建てだった。1階のウィンドーには油彩画、水彩画、額縁などがならぶ画材店、コーヒー一杯が700円の高級喫茶店、シャツターがいまなお降り切った宝石店だった。頭上の看板をみると、2階にはTAKANO



画廊の看板が出ている。おなじフロアには美容室、法律事務所が入居しているようだ。

3階からの上部はビジネス関連の会社名が立ち上がる。

井伊は迷わずビルのなかに入った。エレベーターが二基あった。室内階段は一カ所で、避難階段を兼ねる。2階の『TAKANO 画廊』はマロニエ通り側にあった。透明ガラス・ドアには、【クローズ】の札が下がる。

室内灯がすべて消えた画廊は、誘導灯のみで、うす暗い。

「どの絵から、猫が逃げた？」

井伊は顔が透明ガラスにつくほど目を凝らした。風景画のなかに猫がいる絵が多そうだった。

「きょうはお休みです。城山比呂志展は、あさつての11時半からです」

その声でふり向くと、60歳前後の、品の良いスーツを着た女性が立つ。顔の輪郭やつくりがどこか布施和香奈に似る。

(きつと母親だろう)

井伊はそう読んだ。

「あさつてからとは……。銀座の画廊で、猫を描く画家の個展がある、と人づてに聞きましてね。けさ札幌から早めの飛行機できたんですよ。もう開催されているものだと信じ込んで。あさつては札幌フォーラムだし」

かれはことさら残念がつてみせた。

「わざわざ札幌から……。少しのお時間なら、私が立会いで、特

別にお見せしましょう。まだ、アバウトな展示ですが」

彼女がマスター・キーで、ガラス・ドアの施錠を解除した。室内灯が点けられた瞬間、両サイドから、一気に猫が飛び出した雰囲気だった。

「……どれも猫の目がよくかけている、良い絵だ」

井伊は猫嫌いで、そのうえ絵画の値打ちがわからない。人物画は目を濡れたように描くのがむずかしいと、どこかで聞いたことがある。それを猫に置き換えて喋ってみたのだ。女性の表情から、あながち間違っていないようだ。

「城山先生は一昨年のコンク

ル受賞から、人気が出てきた、中堅の画家です」

小さな号数では5万円から、

30万円を超える作品までがならぶ。

「今回はニュージーランドで描

かれた、作品が多いんです。です

から、猫もなんとなく、日本の猫とはちがうでしょ」

「なかなか、いい猫がそろっている」その実、内心では『野球場の

観覧席』のほうが好きだった。猫が最も目立たず、草野球を観戦する子どもたちの熱気が伝わってくる作品だ。スポーツ特有の躍



動感があった。

「あら。この受賞作の猫はどうしたのから？」

彼女が小声ながら、おどろきの声をあげた。それは『水瓶と猫』という題名の作品だった。猫が消えたたと和香奈が騒いでいる作品だろう。

「絵のなかが狭くて、猫が逃げたのかな？」

「冗談が上手ですね」

彼女は自分の感情をつよく抑え、心のなかは見せない、そんな態度に思えた。

「城山比呂志さんが、受賞作を描き直した？」

かれはさぐりを入れてみた。

「それは考えられません」

「猫はどの場所にいたんですか」

「水瓶の奥の、ここに座っていました」

彼女が指したところには、新しい落葉が3枚ほど描かれていた。室内灯の光線で、それらの葉表が濡れたように、つややかに光る。青い水瓶には古い落葉が浮かぶ。新と旧の落葉の相乗効果が作品



を盛り上げていた。

「何者かが、受賞作と偽物とさし替えたんですかね？」

というと、彼女の横顔には不快な表情が浮かんだ。

「画廊は大切な美術品、芸術品をお預かりしています。施錠もセンサーもしっかりしています。夜間は警備会社におねがいしていますから」

「いい加減なガードマンもいるからな」

かれはけさの冷凍機に対応できなかった、ガードマンを思い浮かべた。

「作品はまちがいがなく城山先生のタッチです。画廊の経営にも携わり、絵画コンクールの審査員もやっていますから」

彼女は自信のある口調だった。

「審査委員なら、目は確かだ。画廊主なら、絵を観る目は肥えているし、贋物がんぶつは見破れる。それは当然だ」

「お名刺をいただいております、次の展示会からご案内いたします」

セーフティー池袋店の名刺は出せなかった。井伊は胸もとを探るふりをしながら、

「そうか。いま銀座ホテルのクロックに預けてきた、バッグのなかだ」

「ごめんなさい。他の用がありますので」

彼女は追い払う態度に変わった。

「忙しいのに、私ひとりのために鑑賞させていただいて、感謝で

す」

画廊から出ると、彼女はガラスの玄関鍵を施錠し、斜め前のエレベーターに歩み寄り、ボタンを押した。こちらをまったく見ず、無視した態度だった。気持ちの良い別れではなかった。

井伊はあえて階段で、一階まで降りてみた。画材店の横に出てきた。まだ開店前で、こちらもうす暗い。正面横のガラス面には『きぬた美術教室』のポスターが貼られていた。井伊が見つめていると、ビルのドアが開閉し、30代半ばの女性が歩み寄ってきた。こちらを意識している。どこかで見覚えがある。

「そうか。あのときの帽子だ」

皮製の前ひさしの付いた『カスケット』帽子だった。岡本1丁目、布施和香奈を探しているときに、高級乗用車に乗っていた、芸術家タイプの子だ。

「御用ですか。うちの営業は11時からです」

カスケット帽子の女が足を止めた。

「店の品物でなく、この『きぬた美術教室』に興味を惹かれたもので。油絵でも、習ってみようか、と思いませんか」

井伊はポスターを指した。

「この教室は、美術系大学の受験指導です」

「予備校だったのか。40歳半ばで、美大までいつて習う気はないし」

「一般の方だと、どこかカルチャーセンターを当たられたら、いかかですか」

彼女はあまり親切な態度ではなかった。廊下の奥のドアを開けて消えた。

井伊は、鷹野ビルを出ると、銀座四丁目まで足を運んだ。三越デパートの食品売り場をのぞき、開店状況とか、品揃えとかを見てまわった。セーフティーの売場づくりに取り入れたいものも多い。

しかし、かれの意識はどこまでも布施和香奈にあり、早ばやとデパートから出てきた。そして、地下鉄・銀座駅から渋谷経由で、二子玉川駅に向かった。

かれは腕時計をみた。まだ余裕で、11時半ころには着くだろう。

（おれのジnkスは、余裕あるときは、待ち人は遅れるか、現れない）

かれの予感が当たった。渋谷駅で人身事故が発生したといい、地下鉄の電車が、途中駅で停まってしまったのだ。

最近の電車は毎日、どこかで人身事故という名の、鉄道自殺が発生している。経済的な破綻、現代的な鬱が主な原因らしい。電車は時間通りに走るものだと決めつけていた、自分のうかつさ



を知った。

井伊佳元は迷った。この電車内で、じっと待っているべきか。駅の外に出てタクシーを拾うべきか。タクシー乗り場はきつと長い行列だろう。かえって、遅くなり、失敗することもある。

彼女の電話の切り方が何度もよみがえった。『お世話になりました』といったことばが耳に焼きついて離れない。苦境から思いつめた人間がプラットホームからふいに飛び込むように、和香奈は多摩川に身を投げるかもしれない。

女性一人の生命がかかっているのだ。ここで遅れたならば、彼女は死んでしまう、と駅員にかみつきたい心境だった。そんなことを叫んだところで、電車が動くはずがない。

【つづく】

写真モデル・奈良美和さん（コーチ／コミュニケーションアドバイザー）

絵画協力・高田雄太さん（画家）

写真提供（猫）・中嶋賢子さん（会社員）

取材協力・森田画廊（銀座一丁目）、PIGA（青山）

取材協力・中村裕子さん（博雅・豊島区）

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】